

Title	ある深層の物語の読解：ムージルの『特性のない男』研究のための序説
Author(s)	大川, 勇
Citation	研究報告 (1985), 1: 1-40
Issue Date	1985-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/134368">http://hdl.handle.net/2433/134368</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# ある深層の物語の読解

## — ムージルの『特性のない男』

### 研究のための序説 —

大 川 勇

#### は し め に

ムージルの『特性のない男』（第一巻1930年、第二巻1932年〔未完〕<sup>1)</sup>）を論じる際、既に定式と化した枠組の一つに〈Ratio und Mystik〉がある。この二分法の枠組は作品の主人公ウルリッヒの二面性に由来するものであり、これをどう解釈するかはムージル研究の当初からの大きな問題の一つであった。

作品遺稿部の編集に関する1960年代の原典批判論争も、一見して文献学的な形をとりながら、実は未完に終わったこの小説が究極のところRatioとMystikのどちらに傾いているのかをめぐる争われたものであったと言えるし、その場合、問題は更にムージルは合理主義者か、それとも神秘主義者かという、より根源的な二者択一を内包していた。しかし初期ムージル研究が孕んでいた豊かな混沌とでも言うべきこの二者択一は、問題が原典批判と絡み合っていたためか、その最終的決着がつけられないまま融和的中間者の裁断を仰ぐに到った。60年代後半のはば同時期、W. RaschとE. Albertsenによって相次いで為された「RatioとMystikの関係は（…）二者択一的な関係ではなく、（…）両者のジテンーゼを目指す相補的な関係である<sup>2)</sup>」という裁定がそれである<sup>3)</sup>。この裁定は70年代半ば、〈Ratio und Mystik〉をめぐる研究史を総括したD. Goltzschiggによって最終的な承認を受けた形となり、以後公式的見解となる<sup>4)</sup>。

だが一見明快な弁証法的図式にもかかわらず、この公式の意味するところは必ずしも明晰ではない。例えばAlbertsenがこの結論に達するのは、まず作品におけるRatioとMystikの現われをそれぞれ別個に抽出し考察することによって、両者が厳密に区別されるものではなく、Ratioの中にはMystikが、Mystikの中にはRatioが潜んでいるのを認めるからであるが、それ故に両者を「相補的」というこ

とはできるとしても、何故相補的な二者が「ジンテーゼ」に向かうと言えるのか。素朴に考えればジンテーゼとは、相対立する二者の緊張の上に成立するものであろう。そうではなく Ratio と Mystik の境界が曖昧であり、両者が相補的關係にあるのなら、そもそもジンテーゼを求める必要はないのではないだろうか。我々はこの第一の公式をひとまず括弧に入れることから出発しよう。

ところで < Ratio und Mystik > は又、作品の構成上の問題と共に語られるとき、「小説の第一巻ではウェートは Ratio の領域にあり、第二巻では Mystik が < 別の状態 > という形をとってより強く現われる」( Goltschnigg ) という第二の公式を生み出す<sup>9)</sup>。確かに第一巻と第二巻との間には、断層とも呼ぶうる落差が認められる。< 平行運動 > の場で Ratio の行使による社会批評を主たる任務とする第一巻のウルリッヒは、第二巻では一転して Mystik への沈潜に入るように見えるのである。では何故そうなるのか。“ohne Eigenschaften”を、個人々の同一性がその社会的役割にのみ帰せられる時代の危機と結びつける論旨の中で、B. F. Hyams は次のように述べる。

ウルリッヒはこの問題を(第一巻では)“ratio”によって克服しようとする。が、成功しない。第二巻で彼は、幼年期以来「失われていた」妹に出会う。(…)その妹を通して宗教的感情の要素と愛とがウルリッヒの生の中に入ってくる。<sup>1)</sup>

Hyams は Goltschnigg の指定した第二の公式を一層簡略化した上で、第一巻から第二巻への移行の理由を、Ratio の破産とそれに続く妹アガーテとの再会に帰している。だが問題のこのような図式化には疑問を呈さざるを得ない。まず第一に、Goltschnigg が慎重な留保を付けていたように、第一巻での Ratio は Mystik に比べてより強く現われているのであって、そのみが発動されているわけではない。このとき、第一巻を Ratio による試みの破産と要約しうるであろうか。第二に Mystik に関しても、我々はともすれば第二巻のウルリッヒ / アガーテによる < 別の状態 > の探究に目を奪われがちであるが、その要素は既に第一巻において、ウルリッヒの二面性もしくは分裂という形で示されているのであって、アガーテの登場によって突然現われるのではない。であれば、何故アガーテは第二巻の開始と共に呼び出されねばならなかったのか。

私は以下の小論の中で、上の二つの問いに答えていきたいと思う。その際私は考察を第一巻に限定することによって、Ratio と Mystik を観念的抽象のレベルか

ら引き下げ、もう一度この小説の持つ具体的構造の中で捉え直してみたい。Hyamsに限らず、公式化された見解に従って＜Ratio und Mystik＞の問題を考えようとすると、作品内部の重要な連関が見失われるように思えるからである。第一巻におけるMystikの、目立たないが確実に存在する流れに着目し、RatioとMystikの根底に潜むものを探り出すこと。そのとき開けてくる第一巻内部の構造から、表面上の断層によって隔てられた第二巻を直接第一巻に接続する、言わば深層の回路を発掘し、そこに託されたムージルの願望を読みとること。それが本稿の目的である。

## I. 批判の精神

『特性のない男』第一巻は二部に分れている。最初の19章から成る第一部は、「一種の序文」と題されていることとわかるように、＜平行運動＞を中心とする物語が始まる前の、小説全体に対する導入部の役割を果していると考えられる。ここでウルリッヒはまだ目立った動きはしていない。が、既に彼を規定する種々の状況は示されている。

パロディーの手法ではあるけれども、「注目すべきことにここからは何もわからない」と題された第1章からは、小説の冒頭を規定する時間と場所が「1913年8月のある晴れた日」の「首都にして帝都たるヴィーン」であることがわかる<sup>8)</sup>し、以下次々と『特性のない男』が少し前外国から帰ってきたばかりで、現在32才であること（第3章）、ボナデアという恋人を持つに到り（第7、12章）、幼な友だちであるヴァルター／クラリッセ夫妻と交際していること（第14章）、過去において士官－エンジニア－数学者という経歴を辿ったあげく目標を見失い、自分にふさわしい生の対象を探すために「人生からの一年間の休暇」を取ったこと（第9－11、13章）等々の情報が与えられる。なかんずく重要なのは、ウルリッヒが数学者たることを放棄するに到る事態が語られる件である（第13章）。ある日彼は新聞の中に「天才的競走馬」という言葉を発見して驚愕する。一頭の卓越した競走馬がその勝利のために発動される諸特性の故に天才と呼ばれるならば、これまでスポーツの流儀であたかも記録を更新するかのように業績を積み重ねてきたウルリッヒの学者としての特性は、いかに秀れたものであろうと、その価値において一頭の馬のそれに等しいと見做されることになる。しかしウルリッヒはそのようなものの考

え方を受け入れた結果、数学から降りるのではない。第99章ではこの種の思考法に潜む省略と不正確が指摘されるし、だいいち価値の喪失を認めたのであれば何をやっても同じなのであって、ことさら数学を斥ける根拠はないはずである。そうではなくウルリッヒを真に打ちのめしたのは、学問を「一種のトレーニング」と見做してきた彼の内に潜む目標の不在性の発見であり、その衝撃から数学を放棄するのも、現在の自分が「本来そうありたいと願っていた自分」から逸脱していることに気づくからに他ならない。注目すべきはそれが「若い頃」と比べられて一層の逸脱であるとされている点であるが、少なくとも上述の経緯から、人生からの休暇を取るに至ったウルリッヒが、何ものか、仮に本来の自己とでも呼べるものを求めてヴィーンに帰ってきたことは認められるであろう。

以上が第一部で予め示されたウルリッヒの内的状況である。何ものかを求める者という初期条件を背負って、彼が＜平行運動＞の場に送り込まれることを確認しておきたい。では第二部の枠を形成する平行運動は、どのような状況の中にウルリッヒを取り込むのであるか。

基本的スケッチから始めよう。平行運動とは、ときのオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の治世70周年を記念して1918年に催される式典に向けての愛国運動である。同年に行なわれるドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の治世30周年記念祭に対抗して、それとパラレルに行なわれるため、こう呼ばれる。その目的は、発案者ラインスドルフ伯爵の意図によれば、「唯物論的民主主義の渦」の中に巻き込まれているヨーロッパ諸国に対し、「平和皇帝」を中心とする「真のオーストリア」を開示することによって、祖国を世界の範たらしめることにある（第21章）。ラインスドルフは1879年、多民族国家オーストリア・ハンガリー二重帝国を皇帝のもとに一つに結びつけた「マカルト・パレード」（563）の再現を求めているのである。しかし平行運動が具体化し、その実践の場がディオティーマのサロンに移されたとき、運動の目的は微妙な変化を生じる。ディオティーマは唯物論的民主主義に抗してという現実政治の視点を、一挙に「文明という名の同時代人の病」（103）の救済という形而上学的視座へと転換するのである。以後平行運動は、そのための主導的理念を求め始める。ディオティーマのサロンには実業界及び精神界の名士たちが招かれ、そこで時代の様々な思想が開陳される。サロンの外でも平行運動に連動して様々な理念がうごめいている。このことから、平行運動をめぐって「20世紀初頭<sup>91</sup>の思想史のパノラマ」が繰り広げられると言われるわけだが、そのパノラマがどういう色合いに染められているのかを具体的に問うことは、第一巻におけるウ

ルリッヒの言動を理解するために必要なことと思われる。

平行運動の中軸を形成するアルンハイムとディオティーマに照準を合わせて、この二人とウルリッヒの関係を見よう。ディオティーマの言う「文明」とは何か。それは「石鹼、無線電波、数学及び化学の公式に現われる尊大な記号言語、国民経済学、実験的研究」(103)であり、又「無神論、社会主義、そして実証主義」(106)である。そのような現代文明からの解放を求めるディオティーマが平行運動の精神的指導者として見出したのが、プロイセンの「大富豪」(97)アルンハイムであった。魂の欠か態としての合理主義を嫌悪するディオティーマにとって、世界の大企業の嫡子でありながら同時にゲーテを手本とする「大文士」(429)でもあり、自らの著書の中で「魂と経済の結合」(108)を告知する彼は、その全体性の故に魂の救済者たるべき人物となる。アルンハイムを時代の寵児たらしめている「全体の秘密」とは何か(第48章)。彼はどんな分野の専門家とも話のできる博識家である。勿論、個々の専門領域においては所詮アマチュアにすぎないが、一個の精神が通常その対極に位置すると思われる「経済」と結びつき、更には本人の口から「事業と文学」(269)との相似が語られ最も現実的な問題が神秘化される時、全体として作用する偉大さの印象は人々を圧倒するものとなる。アルンハイムは「専門人」に対して「全人」として振舞うことによって成功を勝ち取っているのである。

ウルリッヒはしかし、アルンハイムの全体性もしくは「石炭価格と魂の結合」の中に「一つのベテン」を見る(第67章)。何故ならこの結合は「精神人間」と「現実人間」の分離の上に成り立っており、彼は両者をそのときどきの要請に従って使いわけているのだから。それは換言すれば「分業」である(第106章)。アルンハイムは実業家としては理性の声に従う。しかし仕事から離れるや、その埋め合わせをするかのように「神話、単純への回帰、魂の国、経済の精神化、行為の本質」への信仰告白を行なう。彼の現実を形成しているのは「不快にも合理的な金」であって、「彼の非合理的なものへの崇拜」は金銭という資本主義的現実根ざしている、ということはつまり、現実を隠蔽する機能を果していると言えるであろう(第112章)。アルンハイムの理性への敵対はそれ故、言わば干からびた合理性からの救済を求めている、魂への逃避行なのである。

アルンハイムより素朴に、遙かに直線的に魂を希求するディオティーマも又、救済を求めている。彼女にとっての現実がいかに官僚的な外務省局長トゥツィとの夫婦生活であることが示されるとき(第25章)、平行運動の中で運命的に出会

ったアルンハイムと共に「プラトンの魂の共同体」(281)という「一種の聖性」(575)の中へ参入しようとするディオティーマの願望が、やはり干からびた合理性からの脱出を意味するのであることは容易に見て取れよう。アルンハイムとディオティーマ、この社会的立場の異なる二人——片や既に時代を代表する総合の具現者であり、一方は素朴な一市民の妻にすぎない——の願望は、現実から分離された「第二種の現実」(575)を求めるという構造において、完全に相似形なのである。

ウルリッヒの、個々に切り離して論じられることの多い独創的な理念の一つである「現実を廃止する」という考えも、そのような非合理主義者の願望とのコントラストの中で、その内部に潜む裂け目に打ち込まれた楔として読まれねばならない(第69章)。この考えが出される直前に、ディオティーマとの対話の中でウルリッヒは言っている。「現実の中には非現実を求めるばかげた願望がある」と。この言葉を手がかりとしたい。これまで現実を否定し、現実の彼方にあるものを求めようとする運動は数多く存在したし、今も存在する。例えば「神の国」を求めるカトリック教徒、「未来の国家」を求める社会主義者。ウルリッヒが挙げるのはこの二例だが、「真のオーストリア」という魂の国を求める平行運動も又、その一形態であろう。だが彼らはもし突然自分たちの求めるものが実現したとすれば途方にくれるのではないかとウルリッヒは言う。何故か。彼らの求めたものは「非現実」であって、現実との分離の上に、現実からの離脱として夢想された「第二種の現実」に他ならないからではないだろうか。この脱現実の夢想は、不如意な現実に拘束されていることに対して交付される一種の免罪符であり、アルンハイムの場合にそうであったように精神のベテンである。この夢想する魂は、荒涼たる現実の彼方に幻の美しい花を咲かせることによって自ら陶醉し、ために現実に対する安全弁として作用し、逆に現実を補完してしまう。それは「現在あるものを際限なく過大評価する」ことと、結果的にはイコールなのである。だからこそ、では一日だけ世界を統治できたとして何をするか、とディオティーマに問われたとき、ウルリッヒは「現実を廃止する」と言うのだと私は思う。夢想の母体である現実を廃止すれば、非現実への願望は宙に浮いてしまい、自ずとその虚妄性を露呈するだろうからである。非現実を捏造するのではなく、それが現実の中に予め仕組まれた「ばかげた願望」であることを認識せよ、とウルリッヒは言うのである。

それ故例えば R.v. Heydebrand が「現実を廃止する」という考えについて、これは現実への敵対でも純粋な可能性への逃避でもないと言うとき、それは正しいが——何故ならこれこそディオティーマたちの願望の構図だから——、続けてウルリ

ッヒの厳密さを求める科学者としての姿勢と関連づけて、「そうではなく別のよりよい生の現実（*Lebenswirklichkeit*）のために為される，現在の悪しき生の現実への挑戦である<sup>10)</sup>」と言うとき，Heydebrandはこのウルリッヒの言葉が，彼の批判するディオティーマとの対話の中で発語された，非現実を願望する人々に対する徹底した挑発であることを見落しているように思われる。

この場合だけではない。作品中に頻出するウルリッヒの過激な発言もしくは提言は，多くの場合，対話の中で相手の非合理の迷妄を衝くという形で為されており，それ自体の意味の重要性もさることながら，大胆な挑発の持つ面白さが際立っている<sup>11)</sup>。二，三例を挙げれば，あらゆるものを合理化し専門化する時代にあって全体性を志向するアルンハイムの中に「新しい精神」の誕生を見るヴェルターに対して，人間存在の諸問題に関しても専門家としての科学的人間を要請し，「人生の意味」など一体何のために必要なのかと反問するウルリッヒ（第54章）。ニーチェの思想に鼓舞されて議論よりも行動に走ろうとするクラリッセに対して言われる「積極的消極主義」，更には「世界史の代わりに理念史を生きる」というプログラム（第82－84章）。「資本主義によってばらばらにされた時代の機械的思考様式」を拒否し，「究極的な価値」に基づいた「すべてを抱擁する愛と共同体」を志向する反ユダヤ主義者ハンス・ゼップに対して，彼の志向する中世は「最高の認識」などという究極的な価値を求めたからこそ無知に留まったのだと言うウルリッヒ（第102章），等々。

以上，アルンハイム，ディオティーマに始まり，ヴェルター，クラリッセ，ハンス・ゼップ等，平行運動の内外で「20世紀初頭の思想史のパノラマ」を形成する人物群を見ると，彼らに共通するのが反物質文明，反理性，反進歩等に集約される非合理主義であり，その中に潜むロマン主義的幻想をウルリッヒが繰り返し批判し，その虚妄性を暴くという構図が明瞭に浮かび上がってくる。それは非合理主義の陣営に属さない人物群に対するウルリッヒの態度と対照させられるとき，一層明らかになる。理性と進歩を信じるユダヤ人の自由主義者レオ・フィッschel，また実直に平和のための軍備拡張を主張するシュトゥム將軍 — この二人に注がれるウルリッヒの目差しは暖かい。それぞれの立場から平行運動の成行きを疑惑の目で眺める現実政治家ラインスドルフ及び官僚的合理主義者トゥツィに対しても，彼の攻撃は向けられない。トゥツィが世俗的欲望の欠如がもたらす危険について述べたとき，ウルリッヒはそこに「素朴な客観性」から立ちのぼる「イロニーの香り」を感じ取り，「コーヒー豆をかじったかのような」（595）さわやかさを覚えさえる



のである。これらそのまま肯定されるわけではないが、ともかくも合理主義的と呼んでいい陣営に属する人々と、先に述べた非合理主義者たちとは、その描かれ方が著しい対照を為していると言うことができる。<sup>12)</sup>

そうなる理由はウルリッヒの時代把握に求められる。ウルリッヒの見るところ、世界史はこれまで「二つの精神制度」(248)の間を揺れ動く振子運動であった。一つは正確であるだけで満足し、人間性の諸問題には関わろうとしない。他方は全体性と永遠の真理を求めて、正確さをないがしろにする。時代の振子が大きく後者へと傾いている今、合理主義を時代の病と言う人々を前にして、彼は逆にそのような思潮をこそ「神秘的時代病」(56)と見做すのである。

この時代把握はムージルの共有するものでもあったと考えていいだろう。作品の起点として設定された1913年は、ヴェンダーフォーゲル運動を母胎とする各地の学生組織がカッセル近郊のホーエ・マイスナーに集結し、そこで「自由ドイツ青年」が生まれた年にあたっている。グスタフ・ヴィネケンらが中心となって組織したこの青年運動体が「反資本主義、反技術文明、進歩への懐疑」<sup>13)</sup>等をスローガンに掲げているのを見ると、ハンス・ゼップらの青年運動も、そこから派生した民族主義的分派をモデルとしていることが推測できる。又アルンハイムをめぐって形成される全人対専門人もしくはディレッタント対専門家という二項対立の背後には、1910年代にゲオルゲ・クライスとヴェーバー・クライスの間で交された学問の専門性に関する激しい議論が透けて見える。それだけではない。先に挙げた非合理主義の陣営に属する人物群はおしなべて、「行動」、「魂」、「体験」といった言葉が流行し、「精神から魂への転換」<sup>14)</sup>が叫ばれた時代の刻印を帯びているのである。彼らに対するウルリッヒの対応を見ると、ムージルがどのように時代を受けとめ、それを『特性のない男』という作品の中で批判的に形象化したかがうかがわれるように思う。

G. Müller は作品にこめられた同時代批判の姿勢を、モンタージュ技法の視点を導入することによってくっきりと炙り出す。<sup>15)</sup> Müller によればアルンハイム以下の人物群は、それぞれ直接及び間接の引用を確定できる同時代の、もしくは同時代に尚も影響を与えている思想家を背景に持っており、前者の言動はモデルたる後者の思想を戯画化したものである。精緻な考証を経て、例えばアルンハイムがヴァルター・ラーテナウト、ディオティーマがモリス・メーテルランクと、ハンス・ゼップがオスヴァルト・シュペングラーと、というふうに結びつけられ、そこから『特性のない男』は「モンタージュ技法」によって成り立っており、その意図は「イデ

オロギー批判」にあると言われるとき、Müllerの見解は極めて説得的である。が又、引用の織物としての作品の持つ批判の射程は、Müllerの指摘する個々の非合理主義的イデオログを垂直に貫いて、彼らの共有する同時代の土壌にまで達していることも確認しておかねばならない。第113章で、時代に現われた各種の青年運動、更には表現主義や郷土芸術をも一括してウルリッヒは言う。これら「白昼の中に迷い込んだ夜鳥のように我々の時代を徘徊している、多様な形態の非合理的運動の魂を形成している」のは、「神秘主義的な捉われという根本体験」であり、この神秘主義は「粗野な形而上学的欲求」によって動かされているのだ、と。

ウルリッヒの生を二本の樹木への分裂という比喩で示す第116章で、〈力の樹〉としての生は次のように総括されている。これまで彼が語ってきた様々な理念や要求、

これら、異常に尖鋭化されて、反現実の形を取ってきた彼の思考の枠組はすべて、見紛うべくもない苛烈さで現実に影響を及ぼそうという願望を共有していたのである。(592)

ここで言われる「現実」は、これまでの考察を振り返れば、既存世界の総体という一般的な意味だけではなく、ウルリッヒが絶えず批判と挑発を繰り返してきた非合理主義的同时時代という具体的な意味をも持つ、と解することができる。同時代としての現実には「影響を及ぼす」とは、その徹底した批判の精神によって、時代を覆いつつある神秘主義的思潮の仮面をはぎ、それがいつわりの神秘主義であることを暴露しようとする意志なのである。そして〈力の樹〉に集約されるこの側面が従来ウルリッヒのRatioとして捉えられ、第一巻の主要な性格を担うとされてきた。しかし同じ章で続けてもう一つの〈愛の樹〉について語られ、そこでは〈力の樹〉のとりあえずの有効性が確言されているのである。にもかかわらずウルリッヒは何故、時代の神秘主義を似非神秘主義として否定しなかったのか。あるいは否定できたのか。

前出の、時代の根底に潜む神秘主義的根体験が指弾される章、言わば結審的同时時代批判が為された第113章に注目したい。そこでウルリッヒはハンス・ゼップに対して「一つの物語」を語る。それは過去の恋愛体験の物語であり、その体験によって彼は、ゼップたちが「大いなる秘密」としていることをすべて知ったのだという。ウルリッヒは神秘主義の秘密を体験に基づいて知っているようなのだ。その物

語とは＜少佐夫人の物語＞である。

## II. 深層の物語

＜少佐夫人の物語＞は、イロニーの文体を基調とする第一巻の中であって、例外的に「<sup>16)</sup>抒情的散文」で語られるウルリッヒの過去の体験である（第32章）。彼は当時二十歳の少尉とされているから、第一部で示された三つの経歴の第一段階にあったと言える。青年士官であったウルリッヒは、年上のある少佐夫人と恋に陥る。が、あまりにも大きくあまりにも観念的な愛から逃れるために旅に出て、偶然辿り着いた島で不思議な体験をする。太陽と海に囲まれた島での生活が続くうちに、次第に事物間の差異が消えていき、

彼は風景の中へ沈み込んだ。が、それは言いようのない運ばれでもあった。そして世界が彼の目を踏み越えていくときには、世界の意味が内部から、音のない波となって彼の方へと打ち寄せてきた。彼は世界の心臓部に流れ着いていた。彼から遠く離れた恋人の所までは、すぐ近くの本までと同じだけの隔たりがあった。内部感情が空間もなく存在を結びつけた。夢の中で二つの存在がまじり合うことなく通り抜けるように。存在のあらゆる関係が変えられたのである。この状態はしかし、それ以外には何も夢と共有するものはなかった。明晰な状態であり、明晰な思想にあふれていた。ただその中では、何一つ原因、目的、肉体的欲望によってとは動かず、すべてのものは絶えず新たな円環を描いて拡がっていくのであった。噴水が無限の円環を描いて水盤に落ちていくように。（125）

この体験を特徴づけているのは「運ばれ」（Getragenwerden）という受動態であり、また自己と世界を隔てる境界の消滅（「世界が彼の目を踏み越えていく」）である。そのとき自己と世界の融合の中で、「世界の意味」が波動として「内部から」開示される。求めたわけではない。ウルリッヒは無意志的に「世界の心臓部」へと引き寄せられるのである。気づいたとき既に彼は世界内に包み込まれている。空間的知覚の変容は夢の中での体験に似ているが、「明晰な思想」に支えられている故に幻想ではない。因果律の風がやみ、欲望の一かけらも失われた世界で、あらゆるものが「噴水」のように無限の「円環」を描いて内部からふくらんでいく。こ

のとき時間は永遠の一瞬へと止揚され、ニルヴェーナ体験にも比すべき静謐な至福がウルリッヒの存在を包むのである。それは「比較しようもない穏やかさ、柔かさ、静けさ」という「一つの状態」の体験であった。この神秘的状態の体験が、ウルリッヒによって語られる＜少佐夫人の物語＞である。<sup>17)</sup>

だがこの＜少佐夫人の物語＞は「忘れられていた」物語として唐突に思い出され、「極めて重要な」物語と言われているにもかかわらず、この章が終わると共に再び忘れ去られてしまう。そのためであろう、重要ではあるが単に一つのエピソードとして扱われることが多い。例えば Albertsen が＜少佐夫人の物語＞を取りあげるのは、Ratioに続いて Mystik の領域の検討に入り、その際設けられる種々の項目の一つ“Die Fernliebe”においてであり、しかもそのうちの一例としてにすぎない。<sup>18)</sup>むしろ幼児体験が重視されているほどである。しかし上に見たように、後の「白日の神秘主義」(1089)にも通じる重要な神秘体験である＜少佐夫人の物語＞が単なるエピソードに留まるということが考えられるであろうか。<sup>19)</sup>たとえそれが第113章におけるハンス・ゼップとの会話まで忘れられてしまい、体験が為された島にも似て、作品空間の中で孤島のように切り離されているにしても。

だが厳密に言えば、＜少佐夫人の物語＞は第一巻初頭部の一章に孤立しているわけではない。第68章では話者による言及としてではあるが、「精神のメロディーが自然の楽器から立ちのぼる瞬間」あるいは「身体が神秘的飲物に充たされた杯のようになる瞬間」のことが少佐夫人と関連づけて語られ、しかも少佐夫人体験はその唯一の例であったと言われている。それだけではない。ハンス・ゼップとの第113章以後、二本の樹木によってウルリッヒの生の分裂が語られる第116章、「帰路」と題された第122章、「転回」と題された第123章（第一巻の最終章）と、それぞれ第一巻の末尾にあたる重要な章で＜少佐夫人の物語＞は短いながら想起され、更には第二巻に入っても、「聖なる対話」を構成する一章である第12章、「千年王国」について考察される第22章で引き合いに出される。それは決して忘れられてしまった過去の物語ではないのである。

では何故＜少佐夫人の物語＞は表面上隠されているのか。第32章の原物語の辿った経緯にヒントを求めてみよう。体験の後の少佐夫人との関係が語られる件である。少佐夫人への愛の故に島に逃れ、そこで神秘的体験に出会ったウルリッヒであったが、体験の後その愛は終わりを、「突然の断絶」を迎える。そして言われる。夫人は「非個人的なエネルギー中枢、彼の照明装置の、地下に埋められたダイナモ」になったのだと。「地下に埋められたダイナモ」という言葉は、『特性のない男』

における＜少佐夫人の物語＞の位置を考える場合、かなり示唆的ではないだろうか。夫人と体験後のウルリッヒとの関係を、＜少佐夫人の物語＞と作品全体との関係へとずらしてみると、前者を作品全体にとっての「地下に埋められたダイナモ」として捉える視座が与えられるのである。即ち、＜少佐夫人の物語＞は表面上孤立したエピソードであるかのようなのだが、実は作品の隠された地下に底流する深層の物語である、と考える視座が。そしてそう考えて初めて、これまで漠然と Ratio と Mystik の二面性として捉えられてきたウルリッヒの分裂を正しく解釈する可能性も開けてくるように思われる。

＜少佐夫人の物語＞が想起された後のウルリッヒに目を向けてみよう（第34章）。外出のため自宅の小広間を通り抜けようとしたとき、見慣れたはずの部屋が異様な裸形を呈してウルリッヒを立ちすくませる。「我々の周囲のあらゆる事物を貫いて絶えず流れている流動と鼓動が、一瞬停止していた」。「感情と世界の間の滑らかでひそかな平衡が、一瞬間不安定になった」。この空間の変容と時間の停止は、他にその要因が見出せないならば、直前に想起された＜少佐夫人の物語＞の影響によるものと推測していいだろう。これまでウルリッヒを支えてきた理性を、12年の忘却を隔てて甦った島での体験の記憶が揺さぶり、日常性にひびを入れたのである。路上に出ても尚、感覚の異和は続く。人波の間をさまよいながらウルリッヒは考える。美、真理、目的、見解、現実、これら我々を誘惑してやまないものは本当の現実だろうか、もしかすると「真の現実」は「呈示された現実の上に捉え難く安らっている息吹き」としてしか現われないのではないだろうか、と。今度は既成の現実にはひびが入るのだが、それ以上に注目に値するのは、ここで真の現実が「息吹き」（Hauch）として捉えられていることだ。

というのも「息吹き」という現象は作品の中で何度か、イロニーと共にではあるけれども、あるいは愛と、あるいは世界の変容と結びついて語られているからである。ラインスドルプの去勢された二頭の馬が、愛を具体的な欲望としてではなく、もはやただ「息吹き（Hauch）」（175）としてしか知らないという例。又、ディオティーマを軽蔑しつつも、ウルリッヒの気持ちの中に二人を結びつける「純粋な情愛の息吹き（Hauch）」（277）が入り込むという記述。更には、警官に対して立ちまわりを演じる一人の労働者が、世界を確たるものとしてではなく、「絶えず変形し輪郭を変える不安定な息吹き（Hauch）」（157）として感じ取るという例、等々。このような指摘は、あるいは荒唐無稽な記号の戯れと見做されるかもしれない。しかし私がこれらの言葉にこだわるのは、第二巻遺稿部の極めて重要な章も又

「ある夏の日の息吹き（Atemzüge）」と題されており、そこでは千年王国の出現にも似た神秘的体験が予感されているからである。私には、ムージルが「息吹き」という現象に何らかの意味を仮託していると思えてならないのだが、又ある箇所では、男性的な肉体とは対照的にウルリッヒがやさしく柔かになる場合として、「故郷を喪失した大いなる愛の息吹き（Atem）」（159）にそっと触れられたときが挙げられているのを読んで、この印象はますます強められる。

息吹きとは、先に挙げた例からもわかるように、確たるものを伝えるものではない。愛も世界の変容も、確かなものとしてではなく、予感として、あるいは微かな記憶として運ばれてくる。そうなるのは、運ばれてくるものが現在によって認知されていないからであろう。ここで、運ばれてくるものは「故郷を喪失した大いなる愛」と言われている。ウルリッヒに関わる愛として今我々が想起しうるのは、かつての少佐夫人に向けられた愛だけであり、それは島での体験に裏づけられて、確かに「大いなる愛」であった。しかもその愛は、忘れられることによってウルリッヒの過去の中に安定した場所を与えられておらず、その意味で「故郷を喪失し」といえるとも言える。とすれば、ここに言われる「故郷を喪失した大いなる愛」とは、忘れられた＜少佐夫人の物語＞の中に封印された愛であるとも考えることも可能となろう。ウルリッヒがその息吹きを受けて柔くなるのも、そのとき彼のうちに、失われた愛の記憶があたかも予感のように立ちのぼるからではないだろうか。そして今、人波を行くウルリッヒが「真の現実」は息吹きの中にあるという思いに捉われるとき、真の現実の源泉は、失われた愛と同じ場所にあると思われるのである。即ち忘れられた＜少佐夫人の物語＞の中に。

ここでウルリッヒの二面性もしくは分裂について考える手がかりが与えられる。「故郷を喪失した大いなる愛の息吹き」によって目覚めるのは、男性的な面に対照させられた彼の柔かな面であった。直ちに第116章の＜力の樹＞と＜愛の樹＞の対比が思い起こされよう。＜力の樹＞については前章で述べた。＜愛の樹＞については次のように言われている。

世界に対する幼児のような関係、つまり信頼と献身の原初の記憶がその根底を成しているようであった。（…）残念ながらいくらか滑稽なあの少佐夫人の物語は、疑いもなく、彼の存在の柔かな影の面で起こった完全な生育への唯一の試みであったし、同時にそれは終わることのない反撃の開始の印でもあった。（592）

現実<sup>201)</sup>に立ち向かう意志的な力と、その影のような、世界に対する柔かな関係という二面性が一人の人間のうちにあること自体は不思議ではない。だがそれが分裂として強く意識され、＜力の樹＞と＜愛の樹＞の対立のうちに尖鋭化されるとき、そこには分裂を招いた重大な事件の存在が感じ取られるのである。そしてここで＜少佐夫人の物語＞が＜愛の樹＞の生育のための「唯一の試み」であったとして呼び出され、のみならず「もはや終わることのない反撃の開始」ともなったと言われるならば、＜愛の樹＞の尖鋭化をもたらし、ひいてはウルリッヒの分裂を招いた分岐点に＜少佐夫人の物語＞が位置していることも察知される。更に続けて、「葉や枝がそれ以来樹の表面に生い繁ったが、樹自体は見えなくなったままで、ただ枝葉によってやはりまだ樹の存在することがわかるだけであった」（傍点筆者）と言われるとき、表面からは見えなくなった＜愛の樹＞と、忘れられた＜少佐夫人の物語＞との結びつきはもはや否定し難い。結論づけていいであろう。ウルリッヒの分裂は少佐夫人体験に由来するのである。

だが何故少佐夫人体験は、＜愛の樹＞の自立に伴う＜力の樹＞との共存ではなく、両者の分裂をもたらしたのだろうか。「エッセイ主義」が語られる第62章を見たい。まず初めに「仮說的に生きる」という若いウルリッヒの態度があった。世界史が二極間の振子運動であるならば、現在とはまだ越えられぬ仮説にしかすぎず、それ故彼は世界に対して距離を取る科学者の態度を良しとしたのである。この態度は後に、振子運動という「世界のこの投げやりな意識状態を一つの意志に変え」ようとするエッセイ主義へと発展する。その際問題となるのは中間領域である。科学と宗教との、学者の真理と作家の主観性との間にあるもの。それを考えていくうちにウルリッヒは「一つの領域」に入り込む。

その中ではすべてが既に決定されており、母乳のように意識を柔げるのが彼にはわかった。しかし彼にそれを告げたのはもはや思考ではなく、普通の断片的な感覚でもなかった。それは「全的な了解」であり、あるいは又、ただ風が遠くから一つの知らせを運んでくるかのようでもあった。そしてその知らせは、正しいとも間違っているとも思われず、また理性的とも反理性的とも思われず、あたかもある静かな至福のふくらみが胸の中に落ちてきたかのように、彼を抱えたのだった。（255）

この領域を告知するのは思考でも感覚でもなく、息吹きにも似た風に乗って遠く

から運ばれてくる「ある静かな至福のふくらみ」であるとされる。又、この領域は続けて「状態」であるとも言われている。これが若いウルリッヒの島での体験を暗示するものでなくて何であろう。だがこのような状態から「一つの確信」を得るためには一度それを放棄しなければならない、と彼は考える。「愛する者がその愛を描くためには、愛から去らねばならないように」／ウルリッヒは「感情に語らせる前にまず知ろうとする」のである。知るための手がかりとして彼が選んだのは、自然科学であり数学であった。

ここで、ウルリッヒが軍人をやめ工学に向ったのは少佐夫人体験の直後である、という時間上の対応に注目したい。<sup>21)</sup>第一部で三つの経歴として語られる表層の物語の中では、それについて触れられていない。が、同じ出来事を深層の物語の中で読むとき、この職業の転換は少佐夫人体験と関連した行為であることがわかるのである。ウルリッヒが自然科学者となり、更には数学者となったのは、島での体験に酔う代わりにその持つ意味を厳密に考察するためであった。数学の論文を書いている彼がもしもその目的はと聞かれれば、「正しい生の問題」だけが考えるに値すると答えたであろう、と言われるのもそれ故にである。<sup>22)</sup>それはいつか再び＜少佐夫人の物語＞に辿り着くための長い迂回の始まりであった。

だがこの迂回には一つの落とし穴がある。迂回を始めた時点のウルリッヒにとって、数学に象徴される厳密さへの要求は、＜少佐夫人の物語＞に含まれた「正しい生」に到達するための、あくまで手段だったはずである。<sup>23)</sup>しかし手段とは、ともすればそれ自体ひとり歩きを始めるものではなかったか。ましてある要求が何の成果も得られぬまま長期間掲げられ続ければ、「長い間何かを持ち上げている腕が麻痺するように」当初の意図もまた麻痺してしまう。こうして数学に向けられた厳密な考察の要求は、いつしか自己目的化し＜力の樹＞へと成長する。それと共に、それによって、＜少佐夫人の物語＞は忘れ去られ、無意識の層へと抑圧されるのである。フロイト以降の我々はしかし、無意識層へ追いやられたものがどのような力を意識の上に及ぼすかを知っている。数学の道に進んだウルリッヒではあったが、研究への集中を妨げるものがあり、それは「ある地下の運動」であったと言われるとき、我々はそれを「地下に埋められたダイナモ」としての＜少佐夫人の物語＞、深層へと抑圧された＜少佐夫人の物語＞と結びつけて考えることができるのである。ここにおいてウルリッヒの「分裂」の実態は明らかになる。それは＜力の樹＞による＜愛の樹＞の抑圧であり、同時に深層が表層に与える反圧なのだ。

ウルリッヒが自らの＜少佐夫人の物語＞をいかに抑圧しているかは、それが昏い



記憶の淵から不意に甦ってきたときの、彼の感情の両価性にも示されている。

一瞬、二十歳の青年の心臓が彼の胸の中で高鳴った。その毛の生えた皮膚は、あのとき以来、年と共に厚くなり粗くなっていたというのに。三十二歳の男の胸の中での二十歳の青年の心臓の高鳴りは、彼には少年が男に与える不道德な接吻のように思われた。(123)

この屈折した不快感「にもかかわらず」、＜少佐夫人の物語＞は語られねばならなかった。何故か。その存在を知ることなしにウルリッヒの生の分裂を理解することはできないからであり、同時に『特性のない男』という作品もまた存立しえないからだと思ふ。だが作品の不可視の中心とも言うべき＜少佐夫人の物語＞は、あくまで隠されている。孤立を装い底流することによって、表層の物語を脅かす。

＜少佐夫人の物語＞が想起された日の路上のウルリッヒに立ち返ってみよう(第40章)。想起のインパクトはまだ衰えていない。夕暮れの街を歩きながら彼は「自分でも何故かはわからなかったが突然悲しくなり」、そして思う。「つまり僕は、自分で自分を愛していないのだ」と。これは想起によって活性化された深層の物語に突き動かされての言葉だと解釈できる。ウルリッヒは＜力の樹＞に基づいた表層の生活を営む自分を愛することができないのだが、それが何故かは自分でもわからないのだ。更にこれに先立つ箇所ではこうも言われている。「ウルリッヒは何かあるものに強いられて、自分自身に反して生きている人間である。見たところ何の抑圧もなく振舞っているようではあるが」と。このような事態から生じるのが「二人のウルリッヒ」への分裂である。一人は現実のウルリッヒ、もう一人は…

彼はもっと見えにくいウルリッヒだった。彼が思いをこらしていたのは、一つの呪文を見出すこと、もしかして把むことのできるかもしれない手がかりを、精神の真の精神を、裂けた円環を閉ざしてくれるあるいはほんの小さな、しかし今は欠けている一片の何かを見出すことだった。(…)地面が彼の足の下で流れていた。目はほとんどあけていられなかった。ある感情が嵐のように吹き荒れながら、それでいて嵐のような感情では全くない、ということがあり得ようか。(…)それはしかし、表面は完全に静寂を保った嵐だった。ただ回心の状態、転回の状態だけがそれに近い。(155)

何ものかを懸命に求めようとしているウルリッヒの姿が読み取れるが、この変容した状態を譬えるのに「回心」(Bekehrung)と「転回」(Umkehrung)という二つの言葉が並置されているのに注目したい。Heydebrandが「転回」という言葉の中では感覚の経験と魂の経験が一つに融合していると指摘するように、本来空間の反転を意味するこの言葉のうちには、何やらウルリッヒの内的転回が示唆されているようである。これまでの状況から判断して、ここに生じた空間の転回は、ウルリッヒを＜力の樹＞から＜愛の樹＞へと転換させるべく作用していると考えられ、同時にそれは宗教的な回心にも比せられるべきものと見做されているのである。それに応えてウルリッヒも、「運ばれてきたこの場所」に留まってみよう<sup>24)</sup>と決意するのだが、まさにそのとき彼はある騒動に巻き込まれ、そのまま平行運動の只中へと連れ去られる。平行運動の中での彼は、前章で見たように＜力の樹＞の専制支配とも言うべき同時代批判に駆り立てられ、よって一度見出されそうになった＜少佐夫人の物語＞を一層深い層へと抑圧していくのである。それは二度目の、そして今度は作品の相における長い迂回の始まりであった。

以後、＜少佐夫人の物語＞は第113章まで伏流することになる。といっても完全に、というわけではない。時間的には過去に属するとはいえ、第62章では先に見たようにウルリッヒの分裂の生じる経緯が語られるし、第68章ではウルリッヒの女性関係は少佐夫人体験以来、すべて歪なものになったと言われている。もう一例、第112章におけるアルンハイムの「ある発見」を挙げておこう。それはウルリッヒが理性によって使い古されていない「魂」を持っているという発見であり、アルンハイムはそれをウルリッヒの「秘密」と見做し、自分は秘密を知っている唯一の人間だと思うのである。我々は既にこの「魂」及び「秘密」が＜少佐夫人の物語＞に根ざしたものであることを知っているが、誰もがウルリッヒの理性しか見ていない中で、アルンハイムの示す洞察は鋭いと言える。だがともかくも、誰の目にも見える形で＜少佐夫人の物語＞が再び浮上してくるのは第113章であり、この章を境として明らかにウルリッヒは変化し始める。その足取りを追ってみたい。

第114章ではウルリッヒの最近の軟化が語られる。「彼は柔かくなった。常に攻撃の形を取っていた内部の形式が弛み、一転して優しき、夢、血縁、あるいは知る由もないものへの憧れの中へと移行する気配を示していた」。「知る由もないもの」という言葉の背後に潜むものを彼はまだ確とは知らない。が、それを手探りするかのように、ディオティーマに向かって自らの幼年期の記憶を語り始める。

あなたは信じないでしょうが、僕はいい子供でした。あたたかい月夜の風のようにやさしかったのです。一匹の犬や一つのナイフにどこまでも夢中になることもできたし…(575)

ウルリッヒが幼年期を回想するのはこれが初めてではない。少年期と呼ぶ方がふさわしい第99章の回想は措くとしても、しかし例えば第69章で語られた記憶は、同じくディオティーマと共にいたときのものだが、このように夢幻的なものではなかった。ここでの回想には何か別のファクターが介在していると考えられる。

第115章で事態は更に進む。ボナデアがウルリッヒに言う。「あなたはなぜ、一番自然なことをなさらないの」と。この言葉に促されるようにウルリッヒは一つの夢を回想し、それを手がかりに比喩と現実、比喩と夢の関係を考察する。「比喩という原初の生の状態」を、人は現実や真理という「確固たる物質」と、夢や予感あるいは芸術という「ガラス状の大気」とに分割してきた。だがその中間領域に「第三の可能性」は存在しえないのか、と。この問題が少佐夫人体験後のウルリッヒを襲った、科学と宗教、真理と主観性の間にあるものへの問いと同形であることは容易に見て取れよう。今彼が「すべての道がそこから放射されていく中央広場」に立っていると感じるのも、そもそもの出発点に立ち戻ったからだと考えれば納得できる。再びボナデアは言う。

夢の中ではあなたも考えているわけではなくて、何かある物語を体験しているのね。(582)(傍点筆者)

ボナデアはウルリッヒの「秘密」を知っているわけではない。にもかかわらずその言葉は「ほとんど真実だった」のであり、ウルリッヒはこのとき「彼の人生に入り込んできた明るさ」(590)を感じ取るのである。

だからであろう、続く第116章で、万物は力から生まれるとウルリッヒが言おうとしたとき、「予期せぬ別の言葉」が突然介入してくるのは。その結果彼は「万物は力と愛から生まれる」と言ってしまい、そこから自己の分裂を認識し、最後に<愛の樹>の基底に<少佐夫人の物語>を発見するのである。それは平行運動の中で抑圧されてきた<少佐夫人の物語>の目覚めであった。だが<愛の樹>という「彼の存在のこの非活動的な半面」が、<力の樹>という活動的な半面の持つ有用性はとりあえずのものにすぎない、という「無意識の確信」を持ち続けてきたと言

われるとき、今日覚めた＜少佐夫人の物語＞は地下へと押しやられつつ、絶えずウルリッヒの生を規定し続けてきたこともわかるのである。即ち、目に見えぬ深層の物語が底流として流れ続けていたことが。

事態が決定的となるのは第120章においてである。平行運動はいつしか多大の疑惑を国民間に引き起こし、ついにラインスドルフ邸にデモがかけられる。このとき窓ガラス越しにデモ隊を見下ろすウルリッヒの身に「奇妙な空間の転回」が起きる。

そのとき彼の背後にあると思っていた部屋の印象が収縮し、外へと折り返された。彼を貫いて、あるいは何かとても柔かいものが彼を包み込むようにして、傍らを流れていったのである。（…）群衆が彼の背後を通り過ぎていき、彼は群衆の中をつき抜けて一つの無に達していた。（632）

ここに見られる空間の転回は、第40章において生じた空間の変容体験の再現であると考えられる。かつて「二人のウルリッヒ」に分裂した片われが経験しつつ、平行運動への加入に妨げられて果されなかった＜少佐夫人の物語＞への回帰のための機縁が、ここで再びウルリッヒに与えられたのである。そして今、もはや彼を引き留めるものはない。「犯罪を犯そうという決意」が脳裏をよぎる。犯罪という言葉に具体的な内実はまだないが、それが「一般的なもの、理論的なもの」の拒否であり、「自分自身に関すること、行為を伴ったこと」であることははっきりしている（同時代批判の理論闘争から＜少佐夫人の物語＞へ）。ボナデアの言葉が、幼年期についてディオティーマに語った言葉が、再び想起される（第121章）。何かが起こるという予感に充たされて帰路を急ぐウルリッヒには、夜の歩行者の足音すら「ある重大な告知」のように響く（第122章）。

家に辿り着いたウルリッヒは半眠半覚の状態で、忘れられた恋人の幻を追う（第123章）。世界との関係が弛む。それは「地下水のように深く広がった感情」の変化によってもたらされたものだ。このように変容した空間の波間を漂いつつ朝を迎えたとき、

不意に彼は言い表わし難い、潮が引いていくような具合に、つまりこれ以上それを否定する力が尽きてしまったかのように、自分が既に何年も前に一度いた場所に再び立っていることを悟った。（664）

辿り着いたこの状態を、ウルリッヒは「少佐夫人の発作」と呼ぶ。しかもこの章は「転回」(Umkehrung)と題されてもいる。「転回」とは第40章で予感されたウルリッヒの内的回心を暗示する言葉であった。即ち、そこで予告されていた＜少佐夫人の物語＞への回帰は、ここにおいて完了したのである。

以上見たように、第113章において第32章以来忘れられていた＜少佐夫人の物語＞が再びウルリッヒによって語られてからというもの、ウルリッヒ自身に変化するのみならず、第一巻は急速に終結部に向けて流れ始める。「決定は近い」(599)、「何かが彼にさし迫っている」(653)といった言葉が執拗に繰り返され、ウルリッヒを最後の「転回」の地点まで運んでいくのである。この意味で第113章は表層の物語と深層の物語が交差する場となっていると言える。ムージルがこの章を書くのに意を用いたことは、1930年1月13日の日記に「111章(ゲルダ、ハンス・ゼップ、ウルリッヒ)〔筆者註：草稿段階での章番号。完成されたテキストでは第113章にあたる〕のためにたっぷり一週間を使った。仕事は比較的順調に進んだにもかかわらず<sup>25)</sup>」と記されていることから察せられる。しかもこの章を書き終えると同時に、ムージルは第116章に取りかかっている。第116章が＜愛の樹＞の基底に＜少佐夫人の物語＞を見出す章であることを考えれば、第113章以降、＜少佐夫人の物語＞への回帰に向けて一本の線が作者によって貫かれていると推測することも可能である。更にその一週間前の日記には、「なんとか第111章(=第113章)に取り組むことで、第一巻を終わらせる見込みを得ていなかったなら、ここ数日、私はきっとひどい虚脱状態に陥ったことだろう」<sup>27)</sup>と記されてもいる。この言葉は第113章が第一巻の終了と密接な関係を持つことを示している。そして事実、第113章以降が再び＜少佐夫人の物語＞を見出す過程であってみれば、このムージルの言葉を、第一巻が＜少佐夫人の物語＞への回帰という構造を持つことへの、作者の側からの有力な証言として受け取ることも許されるであろう。

翻って考えるに、ウルリッヒは平行運動に引き込まれる以前、第一部において何ものかを求める者として条件づけられていた。そしてそれは仮に本来の自己と呼んだものからの逸脱の故にであり、彼は「若い頃」の方が本来の自己により近かったと感じていた。ウルリッヒが求めていたのは二十歳の時の＜少佐夫人の物語＞だったのである。

### III. 物語の深層

前章で見たように、『特性のない男』第一巻は大きな円環を描いて＜少佐夫人の物語＞へ回帰するという構造を持つ。だがそれでは、前々章で明らかにされたウルリッヒ（＝ムージル）の非合理主義的同時代に対する苛烈な批判はどういう意味を持っていたのであろう。＜少佐夫人の物語＞への回帰を遅らせるための抑圧装置として、あるいは第二部の標題に示されているように「同じようなことが起こる」表層の物語として、否定されるべきものののだろうか。もし仮に『特性のない男』が第二巻を持たず、見出された＜少佐夫人の物語＞と共に幸福な終幕を迎えるとしたら、そういうことも言えるかもしれない。だが第一巻の後には、遺稿部をも含めればそれまで以上の量に達する第二巻が続くのであり、更には作品の第二の主人公とも言えるべきアガーテが登場するのも、ようやく第二巻にしてなのである。我々は第二巻からやっと本来の物語が始まるのであり、第一巻はそれに対する「一種の序文」の如きものではないかという印象すら抱くほどだ。しかも重要なことは、＜少佐夫人の物語＞に回帰したウルリッヒがそこでそれまでの合理主義的姿勢を捨て、神秘家になってしまうのではないという点である。＜少佐夫人の物語＞を見出した後、窓べに立ったウルリッヒの姿は次のように描かれている。

冷気が彼のこめかみを洗う間に、感傷癖に対するヨーロッパ人の嫌悪が、彼の心をその明晰な硬さで充たし始めた。そして彼は、やむを得ぬならば徹底して厳密にこの物語と向かい合ってみようと決意した。（664f.）

ここで表明されているのは、あくまでも厳密さに依拠しようとするウルリッヒの意志である。Hyams の言うような、第一巻において Ratio による問題の解決に失敗したが故に第二巻でアガーテが要請されるという見解に照らし合わせて、これほど不似合いなウルリッヒの姿はあるまい。我々は、ウルリッヒの同時代批判のために第一巻が大きな円環を描かざるを得なかった理由を求めて、物語の深層に分け入らねばならない。

深層、と言うと、あるいは精神分析の応用という連想が働くかもしれない。実際 K. Laermann はその手法を用いて＜少佐夫人の物語＞を解読<sup>28)</sup>してみせる。Laermann によれば、少佐夫人が意味するのは「母親像」である。その根拠としてまず第一に、少佐夫人がウルリッヒより年上であり既婚者であること、第二にウル

リッヒは少佐夫人を愛するあまり彼女から逃れねばならないこと（Fernliebe）、が挙げられる。即ちLaermannは、少佐夫人が母親像であるためそこに近親姦タブーが働き、ウルリッヒは恋人の性的所有を回避するために彼女との間に自ら空間的距離を置かねばならない（フロイトによればFernliebeは抑圧された近親姦願望の代理形成である）、と言うのである。しかし、その愛の観念性の故に性的結びつきを恐れ、対象から逃れ去ることによって却って観念的な愛を増幅させるという若者に特有の愛のかたちの中に、近親姦願望を読み取る必要が果してあるだろうか。それにもし＜少佐夫人の物語＞におけるFernliebeの側面を取り上げるなら、ムージルの他の作品に見られるFernliebeをも考察の視野に入れなくてはなるまい。Fernliebeはムージル文学を特徴づける重要なモチーフの一つだからである。だが『愛の完成』におけるクラウディーネ、『静かなヴェローニカの誘惑』におけるヴェローニカ、『グリージャ』におけるホーモ等、それぞれ夫、恋人、妻から離れて初めて神秘の愛を経験する人物達の中に、近親姦タブー故の愛の対象からの逃れを読み取ることは難しい。であれば、Fernliebe故に少佐夫人の中に母親像があると言うことはできないであろう。第一の根拠に関しても、年上の既婚女性が皆母親でないことは言うまでもない。

問いの方向を変え、＜少佐夫人の物語＞の持つムージルにとっての意味を探ってみたい。すると伝記上の事実の中から、その源泉となったと思われる一つの体験が浮かび上がってくる。ヴァレーリエ体験である。ヴァレーリエとは、ムージルの若き日の恋の相手と目されている女性であるが、それがどういう人であったかは、研究者の探索にもかかわらず長らく謎であった。近年、パウリーネ・ウルマンという当時の女優がその人であるとする説がK. Corinoによって出され、その人となりも紹介されたが、これもまた推測の域を出ていない<sup>29)</sup> わかっているのはただ、この恋愛体験が1898/99年から1900/01年にかけてのものと推定され、それはムージルがブリュン工科大学の学生であったほぼ二十歳の頃に当たっていることだけである。<sup>30)</sup> だがヴァレーリエが誰であったかということ自体は、さして重要ではあるまい。何故なら、ムージルがヴァレーリエの名を口にするとき、終始一貫してかつての恋人その人ではなく、ヴァレーリエと共にあったときの体験が問題とされているからである。そしてそれは他者を受すること稀であったムージルが、1937年、生涯を振り返って例外的に愛し得た四例の一つとして挙げるほど重要な体験であった。<sup>31)</sup> それがどのような体験であったのかをまず見よう。

1901年のヴァレーリエ宛てと推定されている手紙の草稿には次のように記されている。

僕は野蛮人たちの中を敬虔に歩き回る。敬虔に、—— というのも僕の魂は充ち溢れているのだから——そしてそれを僕は敬虔という。——敬虔に…それは地上の彼方にある国ではない——が、この地上の彼方に。<sup>32)</sup>

かなり高揚した気分の中で書かれたと察せられる文章であるが、恋愛感情による魂の充溢が「敬虔な」(fromm)という言葉と結びついていることに注目させられる。恋愛感情がその情熱の極点において宗教的敬虔に通じるものであることは、歴史上様々なテキストの上で反復されてきた考えであるが、ここでのムージルは、そのように敬虔な愛の境地が地上に存在することを身をもって体験し、その秘儀に触れた喜びを隠すことなくヴァレーリエに伝えようとしているかのようなのである。このとき世界はその変容した相を開示し、その中でムージルは、地上に在りながら同時に現実の地上を越えるという存在様式、とはつまり既成の現実には引かれた境界線が消滅した世界で、充ち溢れんばかりの魂のふくらみと共に直接世界と結びつくという神秘的な存在様式を知ったのではないだろうか。又1902年、日記の中で回想されたヴァレーリエ体験は次のように言われている。

別の種族を形成するのは偉大な愛する人々である——キリスト、仏陀、ゲーテ——ヴァレーリエを愛したあの秋の日々の僕。愛する人々は真理など求めない。<sup>33)</sup>が、何かが自分の内部で全体的なものへとつながっていくのを感じるのだ。

先ほどの手紙の草稿が、一時的な興奮状態の為したものではないことがわかる。「ヴァレーリエとの突然の破局」から「一年たった」<sup>34)</sup>この時点で尚、ムージルはヴァレーリエ体験を広義の宗教的位相のもとに見ており、真理を求めることによってではなく、愛することによって世界の全体性を把握した偉大な愛の人々の系譜に、「あの秋の日々の僕」を加えているのである。ムージルにとってヴァレーリエ体験とは、単なる若き日の恋愛体験に留まるものではなく、それによって自己と世界との関係が一変するような根源的体験であったと考えられる。

このヴァレーリエ体験を<少佐夫人の物語>と結びつける試みは、既に加藤二郎氏によって為されている。<sup>35)</sup>両者の共通項として氏が挙げるのは、要約すれば次の四点である。(1)神秘的な愛の境地における世界の変容状態の体験、(2)当時のムージルとウルリッヒの年齢(二十歳)がほぼ一致すること、(3)手紙を何通も書いて出さなかったこと、(4)体験に比べれば恋の相手の影が極めて薄いこと。以上の共通項を基



礎とした「類比的方法」によって加藤氏はヴァレーリエ体験を＜少佐夫人の物語＞と結びつけていくのだが、両者の関係を実証的に示すことも又、現在では可能である。既に以前から、草稿段階では少佐夫人の名はヴァレーリエであった、というE. Wilkinsの報告は知られていたが、<sup>36)</sup>1978年の新版全集に当の草稿が収録されることによって、それは我々にも確認できるものとなった。1920年代の半ばに成立した草稿（ $s_3 + n - 1$ ）の中で、ウルリッヒと少佐夫人の関係は、アンダース（＝ウルリッヒの前身）と騎兵大尉夫人の関係として語られており、騎兵大尉夫人は確かにヴァレーリエと呼ばれているのである。<sup>37)</sup>しかもそこにおいて神秘的体験が為されたのは、ムージルがヴァレーリエ体験の季節として強調した秋であったとされている。以上のことから判断して、＜少佐夫人の物語＞の背景にヴァレーリエ体験が位置していることはほぼ確実であると思われる。<sup>38)</sup>

ところで、私が＜少佐夫人の物語＞との相関関係の中で何にもまして注目したいのは、ヴァレーリエ体験も又一度忘れられ、後に再び回帰されるべき場という性格を賦与されている点である。1905年4月2日の日記に、ムージルは次のような言葉を書きつけている。

四年間の四分五裂の後、あの精神的発展のラインを再び見出す機会を、ここに設けるつもりだ。あのラインが僕のものだ。（…）あの僕の大きい震撼の時代<sup>39)</sup>の思想を再び掘り出し、吟味して更に発展させねばならない。

「四年間の四分五裂の後」と言われているが、四年前の1901年といえば、ムージルがブリュン工科大学の学生だった頃である。この年の7月、ムージルは技師国家試験にパスし、翌年10月にはシュトゥットガルト工科大学の無給助手として勤務を開始する。が、一年後には早くも技師生活に愛想を尽かし、<sup>40)</sup>1903年10月、再び学生として今度は哲学と心理学を学ぶためにベルリンに赴く。この歩みと平行して、処女作『生徒テルレスの惑い』（1906年）（以下『テルレス』と記す）が書かれていることも忘れてはならない。1902年に着手された『テルレス』はベルリンでも書き継がれ、その完成は1905年2月頃である。上の日記が記されたのがその直後の4月であることを考えれば、ここで言われる「四年間の四分五裂」とは、工学及び哲学の研究に従事していた期間を指しつつ、『テルレス』とも密接に関係していると推測していいだろう。

今少し『テルレス』を振り返ってみるなら、事物の二重性を見てしまうが故に感

い続けてきた主人公テルレスが最後に到達したのは、「死んだ思想と生きた思想がある<sup>41)</sup>」という認識であった。「死んだ思想」とは因果律に基づいた単に論理的なだけの思想であり、どうでもいいものとして否定される。それに対し「生きた思想」とは……

偉大な認識は、ただその半分だけが頭脳の光の圏内で為され、後の半分は内奥の暗い土壌で為される。そしてそれは何よりも魂の状態であり、思想はその先端にただ一輪の花のように付いているだけなのだ。

その最後の芽を高みに迫り上げるためにテルレスに必要な<sup>42)</sup>のは、ただ魂の震撼だけだった。

このような認識に達しながら、テルレスはそれ以上先には進めなかった。それがこの作品の限界であり、ムージルはここで「生きた思想」の構想を呈示するに留まっている。が、別の見方をすれば、『テルレス』を書くことによって彼は「生きた思想」という構想に辿り着いたのだ、とも言えるだろう。とすればムージルの次の課題は、構想をいかにして実現していくか、である。既に『テルレス』の中でそのための手がかりは示唆されていた。「魂の震撼」——この言葉は日記中の「僕の大いなる震撼」という言い方と共鳴して、一つの方向を指し示している。日記から読み取れるのは、1901年以降の歩みを自己本来の「精神的発展のライン」からの逸脱と見做したムージルが、それ以前に存在した「大いなる震撼の時代」に立ち返ってそこで体験された「生きた思想」を再び我が物とし、継承していこうとする姿勢である。ムージルは今、「四年間の四分五裂」の中で忘れられていた言わば生きられた時間を再び見出し、そこに回帰することによって新たな出発の礎石を築こうとしているようなのだ。このとき回帰されるべき「大いなる震撼の時代」として考えられるのが、A. Reniers-Servranckx も指摘するように<sup>43)</sup>、ヴァレリーエ体験の時代である。その終局が1900/01年頃であるという時間的対応に加えて、既に見た体験自体の持つムージルにとっての根源的な意味を思っても、他にそれに代わる重大な事件が見出せない以上、ここで「大いなる震撼の時代」と言ったムージルの念頭にヴァレリーエ体験が置かれていると推測して、ほぼ間違いないと思われる。

事実それを裏づけるように、1902年時の回想以来忘れられていたヴァレリーエ体験への言及が、この年再び日記に現われる。1905年6月19日、『ディ・ノイエ・ルントシャウ』6月号に掲載されたエレン・ケイのエッセイ「生活術による魂

の発展」を読んだムージルは、そこに「自分自身の過去の声」を聞き取り、同時に思考様式の同質性を認めて「ヴァレーリエ伝統<sup>44)</sup>」という言葉を書きつけるのである。更にはその後ほぼ一か月にわたって、日記にはこのエッセイからの抜粋が行なわれており、そこに「ヴァレーリエ体験」、「半ばヴァレーリエ」等の書き込みが見られる。<sup>45)</sup>「僕は道徳的に繊細である。ヴァレーリエの時代以降決定的に<sup>46)</sup>」と記されるのもこの間のことである。以上のことからヴァレーリエ体験への回帰が現実に行なわれていたことがわかるが、作家ムージルにとってより重要なことは、彼がこの時期、ヴァレーリエ体験をもとにした創作の試みを行なっていることであろう。

『ロマンのための準備』と題された1905年のものと推定されている草稿において、<sup>47)</sup>ムージルと同名の主人公ローベルトはヴァレーリエと目される一人の女優を愛する。そのときのローベルトの状態は次のように描かれている。

途方もない嵐が到来した。初めて彼の感覚は金の刺繍をした赤い愛のマントをまとった。彼の全存在が変化を受けた。善意に充ちた献身的感情が彼を襲った。遙かな思想の拡がり、精巧な思想の絡まりがはっきりと見えた。わずかに数週間のうちに、彼は自己を越え出て熟していった。――彼の思想と感情が整う。静寂と成熟の哲学が形成される。――<sup>48)</sup>

荒削りな表現ではあれ、ローベルトの全存在を揺がすような変化、それに伴う明晰な思考の拡がり、自己を越え出ていく存在様式の体験は、後の〈少佐夫人の物語〉に発展していく萌芽として読み取れる。しかしここにはまだ、作者と素材との間の距離がほとんどない。あくまで「ロマンのための準備」、即ちスケッチである。

この最初の小説化の試みは断片に留まりはしたが、その後もヴァレーリエ体験はムージルの創作活動の核であり続ける。1906年の成立と推定されている草稿『イポリット日記』<sup>49)</sup>を見よう。主人公の「僕」(＝イポリット)は社交上の集まりの席でマドレーヌという女性と知り合い、心ひかれる。マドレーヌへの急激な傾斜が為されるのは、ある日イポリットが彼女の前でリルケの詩を朗読した時であった。そのとき彼は突然「ある決定的な転回」、つまり魂の内部における回心にも似た状態を経験するのであるが、この経験はすぐさまヴァレーリエへの記憶と結びつけられ、「ヴァレーリエ期を再び生きたいという願望<sup>50)</sup>」が生じるのである。ただし今度はマ

ドレーヌと共に。

だがこのように露骨な回帰願望は、いかに切実なものであれ、少なくとも作家ムージルにとって名誉なことではあるまい。作家とは、自らの願望をなまの形で語ることを断念した上で、それを作品として形象化することを選んだ者であるはずだ。その意味でこの時点までのムージルは作家ではなかった。たとえば処女作『テルレス』が、多大の誤解と共に好評をもって読書界に迎えられていたとしても、である。勿論『ロマーンのための準備』にしろ、『イポリット日記』にしろ、あくまで草稿であり、最終的に作者によって発表されたものではない。だが同じく草稿でありながら、『グラウアウゲの霧深き秋』（1907年）からは<sup>51)</sup>、そこから一步踏み出した、作家の誕生に向けての胎動が感じ取られる。というのも、この草案の中で主人公グラウアウゲは、「一個の人間を、完全に組み換えられた感情の諸前提によって基礎づける」こと、換言すれば「来たるべき人間」の有り方を呈示することを、自らの使命として引き受けた人間となっているからである。<sup>52)</sup>これは『テルレス』を書くことによって到達した「生きた思想」の構想を、作品のレヴェルにおいて前進させる姿勢だと言える。ここでムージルは、ヴァレーリエ体験へのやみくもな回帰を、体験に内在した「感情の諸前提」に基づいて「来たるべき人間」を描く方向へと転換しているのである。この転換がなければ、ムージルの第二作『結びつき』（1911年）は生まれなかったのではないかと、思う。

1908年に着手され1911年に完成したこの作品集については、既に別の場で＜男性原理＞から＜女性原理＞への転位という視点のもとに述べたので、ここでは繰り返さない。<sup>53)</sup>ただ本稿の文脈の中で確認しておきたいのは、『結びつき』は、1905年以降迎られたヴァレーリエ体験への回帰、及びそれに基づく創作の試みの延長線上に位置するムージルの一つの到達点である、ということだ。わけでもその完成度において比類なき作品『愛の完成』は、『テルレス』の限界を乗り越えて「生きた思想」を見事に形象化している。作品の末尾におけるクラウディーネの独白に、少しだけ耳を傾けてみよう。

それは狭い峠道をのぼっていくときのよう。獣も人も花も、何もかも変わっていく。自分自身がすっかり別のものになってしまう。そのとき思うの。もし最初からここで暮していたとしたら、私はこれをどう思うかしら、あれをどう感じるかしらって。踏み越えなくてはいけないのがたった一本の線だなんて、奇妙なこと。（…）この境界線を踏み越えるたびに、私はそれをもっとはっきりと感じて

いくに違いない。私はだんだん蒼ざめていく。人は死んでいく、いいえ、しおれていくのでしょう。樹々も、獣たちも。そしてついにすべてのものがただ一すじの薄い煙となって…続いて一つの調べとなって…空中を流れていく…虚無の上を

54)  
...

花も樹も獣も変貌し、事物を隔てる差異が消滅した空間で、クラウディーネは輪郭のない煙となり、目に見えぬ調べとなって、世界の中へと溶け込んでいく。このとき彼女の「愛」は「神さま」のように大きな愛となり、すべてのものの上に漂いつつ遍在するのである。<sup>55)</sup>かつてムージルは、ヴァレーリエ体験によってキリストや仏陀らの愛の導者の系譜に自らも加わった、と日記に記した。このような言い方がいかに若さの気負いに見えようとも、少なくともムージルにとって、ヴァレーリエ体験はそう自覚させるだけの真実を含んでいたのではなかったか。だからこそ彼はこの体験にこだわり続け、ついにはクラウディーネの辿り着いた愛のかたちの中に、その理想化を果たした。即ちムージルは、ヴァレーリエ体験の内部に秘められた真実を、言語化することによって、『愛の完成』という作品へと結晶させたのである。

さて、再びここで『特性のない男』に目を向けてみよう。すると、ほぼ二十年の時を隔てて、この二つの作品がヴァレーリエ体験を媒介に結ばれていることがわかる。＜少佐夫人の物語＞の背後にヴァレーリエ体験があることは既に述べたが、より広いパースペクティブの中で見るなら、＜少佐夫人の物語＞に描き出された神秘的体験は、『愛の完成』の到達点を引き継ぎ、それを更に普遍化した「抒情的散文」によって展開したものとして読めるのである。この発展的連続性を、『特性のない男』が死の直前まで書き継がれたムージルのライフワークであり、そこにおいて＜少佐夫人の物語＞は不可視の中心とも言うべき重要な役割を果たしているという既に確認された事実の中で捉えるとき、ヴァレーリエ体験はムージルの生涯を貫いて創作の源泉であり続けた、言わば作家にとっての原体験ではなかったか、と思われるのである。

では『特性のない男』は『愛の完成』の変奏によるヴァレーリエ体験の再度の作品化なのか、と問えば、否であろう。これまでの考察からもこの体験を背景とした＜少佐夫人の物語＞の重要性は明らかであるにもかかわらず、それは第一巻において、最終的に回帰されるにせよ、表面から隠された深層の物語となっている。そして＜少佐夫人の物語＞が作品内で底流を強いられたのは、平行運動の場におけるウルリッヒの同時代批判に多大のエネルギーが注がれたからであった。それが時代の

土壤にまで及ぶ徹底した非合理主義批判であることはⅠ章で述べたが、では何故ムージルは、彼にとって極めて重要な＜少佐夫人の物語＞を忘れさせてまで、第一巻の大半を非合理主義批判に費さなければならなかったのか。

ここでムージルの時代との関わり方に目を向けてみよう。歴史家の教えるところによれば、世紀転換期に既に、「実証主義への反逆」を公分母とする広義の非合理主義の台頭は見られるものの、それがドイツ語圏において精神文化全般にわたる「地すべり的な変化」を引き起こすに到るのは1910年代以降である<sup>56)</sup>。そしてそれまで凡そ時代との関わりとは無縁だったムージルが社会批評的発言を開始するのも、『結びつき』を書き終えた後、即ち1910年代以降のことなのである。

1913年に発表された二つのエッセイ「数学的人間」と「分析と総合」を読めば、何かにつけ「空虚な合理主義」<sup>58)</sup>、「不毛な合理主義」<sup>59)</sup>といった言葉を口にする同時代の作家たちの存在を、ムージルがいかに苦々しく思っていたかがわかる。分析的な精神を誇り総合を求めると称する彼らは、ムージルから見れば「知性のない感情など(…)太っちょのモブス犬のようなものだ、ということを忘れて」にすぎない。だから「ドイツの小説を二冊も続けて読めば、そのたびごとに積分の問題を一つ解いて減量に努めなければならない」<sup>60)</sup>。このような挑発的発言は後の『特性のない男』第一巻に直線的につながっていくものであり、作品における同時代批判がムージルの肉声であることの証左ともなうが、今我々の抱えた問題との関係からとりわけ注意を引くのは、ヴェルター・ラーテナウの著『精神の機構のために』(1913年)への書評として書かれた「ある超心理学への註釈」(1914年)である。

このエッセイは、ラーテナウの提唱する「魂に充ちた人間」という「人間類型のプログラム」に対する徹底した揶揄で始まるのだが、読み進むうちに我々是一種奇妙な事態に気づく。ラーテナウの説く「魂に充ちた人間」とは「魂あるいは愛の体験」に基づいた人間のことであり、そこで描かれる体験はムージル自身の体験と極めて類似しているように思えるのである。例えば「この愛は自然の中へと沈潜しつつ、自己を失うことはない」という言い方、あるいは「倫理的行為があるのではない、倫理的状態だけが存在する」という言い方<sup>62)</sup>、これらはヴェレリーエ体験と＜少佐夫人の物語＞を結ぶ線上で、ムージル自身によって記されたとしても不思議ではない表現であろう。にもかかわらずムージルはラーテナウを否定する。そのような「神秘主義の根本体験」から新しい人間を創造しようとするラーテナウの試みに、他ならぬ「体験」が欠けているからである<sup>63)</sup>。ムージルの考えでは、そのような試み

を行なうためには「一つの体験からそれに属する人間の精神を構成し、理性に代えてこの精神で世界を考える」ことが必要であり、ラーテナウの試みもそこにあるはずなのだが、彼は「理性と分析」を嫌悪するあまり、「魂」とか「直観」とかの曖昧な、しかしそれ自体既に合理的な概念語に依存することによって、体験を形骸化してしまう。その結果後に残るのは「体験の抜殻」にすぎない。<sup>64)</sup> そのことに気づかず無邪気に魂の体験を讃美するラーテナウに、ムージルは苛立つのである。

このラーテナウ批判からわかるのは次の二点である。第一に、ムージルの批判が向けられているのは神秘の体験それ自体ではなく（「この状態は人間的に重要である」<sup>65)</sup>）、体験の捉え方であること。ラーテナウの体験讃美は、一方では体験の形骸化を招くが、同時に厳密な思考による現実への媒介を欠くことによって、体験を現実から切り離された夢想的かつ美的状態に固定する（「この書における体験の描写は美しい」<sup>66)</sup>）。この点は後に『特性のない男』において、ラーテナウをモデルとするアルンハイム及びディオティーマの抱く「第二種の現実」願望批判として、より明確にされることになる。第二に、同じことの言い換えであるが、ムージルの批判はラーテナウの言う神秘の体験を自ら共有するが故に為されること。それは純粋な合理主義の側からの批判ではなく、言わば内部からの告発なのである。

上に見たラーテナウ批判は、一人ラーテナウだけに向けられたものではない。「精神と経験。西洋の没落を免れた読者のための註釈」（1921年）というイローニッシュな標題を持つエッセイでも、シュペングラーが『西洋の没落』（第一巻 1918年）において用いる概念の曖昧さ、とりわけ理性的認識に対して持ち出される「直観」（Intuition）という言葉の曖昧さをムージルは批判する。ムージルにとって「直観」とは、説明困難な事象を語るときの重宝な合言葉であり、そこに含まれた理性の敵視は、ただ理性の使用法を知らないがための迷妄にすぎない（「常に言われるように理性が過剰なのではない。理性を適切な箇所<sup>67)</sup>で用いないのだ」）。必要なのは「類比的なもの、あるいは非合理的なものの論理を探究する試み」<sup>68)</sup>であり、それは理性を斥けては不可能なのである。

だが時代は日一日と反理性、非合理の色合いを濃くしつつあった。指導者を熱望する青年層を引きつけているのは、ゲオルゲやクラゲスらの神秘主義的教義であり、それら様々なクライスにおける「精神的独裁者崇拜」<sup>69)</sup>は、ムージルの嫌悪するものではあっても、無視できない影響力を時代に及ぼしていた。そのような時代にあって、ムージルは極めて非政治的に非合理主義批判の論陣を張ったのであるが、それというのも彼が神秘の体験を自らの創作の源泉とする作家だったからであるこ

とは、これまでの考察から既に明白であろう。非合理主義者が批判するような「ただの合理主義者<sup>70)</sup>」は、ムージルにとって初めから問題ではなく、神秘の体験を歪曲して流布する人々にこそ鋭い批判は向けられねばならなかったのである。それと同様のことが『特性のない男』という作品の上でも起こったのではないだろうか。一度語られた＜少佐夫人の物語＞は同時代の神秘主義との類似の故にいったん忘れられねばならず、それが再び正面から取り扱われるためには同時代との対決が不可避だった——そう考えれば、＜少佐夫人の物語＞の置かれた作品内での奇妙な位置も納得できる。そしてそう考えるとき、第113章において、ウルリッヒの結審の同時代批判と＜少佐夫人の物語＞の再浮上が同時に為されているのも偶然とは言えまい。＜少佐夫人の物語＞は、同時代の非合理主義への最終的な破産宣告と交差して、再び作品の表面に現われることを許されるのである。

だがそのような批判を経て見出された＜少佐夫人の物語＞が、果して無垢のままいでられようか。他者に対する攻撃は、翻ってムージル自身をも撃つものではなかったか。『愛の完成』は確かに神秘の体験を描いた、ムージルの指標的到達点である。が、形而上学的清朗と晦渋の溶け合ったこの作品は、「魂の処女地」<sup>71)</sup>の発見であるとして、二、三の表現主義者から称讃される要素、即ち「現実のない精神」<sup>72)</sup>——ムージルは表現主義を、その内実のない抽象性の故にこう規定している——と化す要素をも孕んでいた。現実から切り離された所に美しい体験を浮遊させることの危険性を絶えず告発してきたムージルが、その過程で自らの内なるロマン主義に気づかなかったはずはない。ヴァレーリエ体験は単に描写されるだけではなく、その内部に潜む論理こそが探究されねばならないのである。

『別の人間を見出す試み』と題された作品の構想メモ(1921年)からは、そのようなムージルの乗り越えの姿勢が見て取れる。ここでムージルは、作者と登場人物の混合体としての「私」を設定しているのだが、それは「別様に考える」人間、即ち思考する人間と規定されているのである。<sup>73)</sup> 続けて「別の人間」のモデルとして、キリスト、孔子、老子、ニーチェ等の名が挙げられるのを見ると、「私」がやはりヴァレーリエ体験に基づいて形成された人物像でありながら(「あの秋の日々の僕」)、この体験に依存するのではなく、そこで得られた「倫理的体験」もしくは「愛の状態」<sup>75)</sup>を考察の対象とする人物であることがわかる。つまりムージルは、自己を反省しヴァレーリエ体験を検証しうる人物を構想しているのである。この「別の人間」が後のウルリッヒに成長していくことは、今問題にしている構想メモが『特性のない男』に注ぎ込む支流の一つと見做されていることから明らかであら



<sup>76)</sup>  
う。

『特性のない男』はムージルにとっての集大成であり、過去の作品のすべてはこの一作に向けて収斂していく、とはよく言われることであるが、それは過去の集合という意味においてではなく、その乗り越えと解してこそ正しい。例えば1905年時のエレン・ケイのエッセイ抜粋には、その時期は確定できないが、そこそこに「ディオティーマ」あるには「ラーテナウ」という書き込みが追記されており、その内容は『特性のない男』のディオティーマの章（第25、94章）に取り込まれ、戯画化されている。<sup>77)</sup>かつてヴァレーリエ体験への回帰願望を託したエッセイが、ここでは理想的なものと見做されているのである。また第86章では、『結びつき』中の他の一篇『静かなヴェローニカの誘惑』からの一節が、若干の省略を除いてほぼ文字通り「ある詩人」の文章として引用されている。<sup>78)</sup>が、それはディオティーマとの愛を通してアルンハイムの中に呼び醒められた「夢想的予感」と関連しての引用であり、「ある詩人」（＝ムージル）は他ならぬそのアルンハイムによって評価されているのである。このような手の込んだ仕掛けの意味するところについては、第二巻第11章のウルリッヒの言葉がかなり明確に語っている。この章の末尾で、ファン・ゴッホやリルケ、あるいはドイツ民族の高貴な自然感情を讃える人々の中に「ある神秘的な第二の生活」の名残を認めてウルリッヒは言う。「愛していればこそ、僕はそれを嘲るのだ」と。この言葉を読むとき、ムージルの挑発的同時代批判は、ヴァレーリエ体験に根ざした、自らの内なる夢想的神秘主義に対する批判をも内包しているように思える。

ルネ・ジラールは『地下室の批評家』の中で次のように述べている。

作家の仕事は科学者と同じく、長い年月に及ぶのが普通である。しばしば作家の活動期間はすべて、彼が絶えず取りあげるごく少数のテーマと問題をめぐって費やされる、あるいは費やされるかのように思われる。もし何も新しくいうことがなかったとしたら、作家は同じテーマの繰り返しを必要とは判断しないだろう。（…）作家は以前書いた作品に不満を覚えるようになったので、あるいは最初から満足していなかったのかもしれないが、同じテーマの絶えまない修正を行なっているのだと考えられる。<sup>79)</sup>

ジラールはこの考えを、ドストエフスキー等を例にして確かめていくのだが、同じことはムージルの場合にも言いうるのである。

## 結 び

本稿のはじめに私は二つの問いを立てた。そのうちの一つは既に答えられている。ウルリッヒの第一巻における Ratio の発動は、同時代の非合理主義批判に向けられたものであり、それは破産を宣せられているのではなく、＜少佐夫人の物語＞に回帰するための不可避の迂回であった。ではもう一つの問い、アガーテは何故第二巻の開始と共に呼び出されねばならなかったのか。これについても既に明らかにされた第一巻の構造自体が、そのわけを語ってくれる。アガーテは＜少佐夫人の物語＞への回帰という構造の指し示す終結点において要請されているのである。

第一巻の最終章で＜少佐夫人の物語＞の地点に立ち返ったウルリッヒは次のように思う。

彼の理性の見解に従えば、危険は存在しなかった。というのも、そのような愚行を繰り返すことのできる相手がいなかったからである。(664)

「そのような愚行」とは少佐夫人との恋愛体験のことであり、それを「繰り返すことのできる相手」とは、N. Hayasaka が言うように、<sup>80)</sup> また第二巻に入ってウルリッヒが自ら悟るように、<sup>81)</sup> アガーテを予示するもの以外の何ものでもない。即ちアガーテは、＜少佐夫人の物語＞をウルリッヒに再体験させるために呼び出されるのである。アガーテが初めて登場する第二巻第1章の標題「忘れられていた妹」に注目したい。第32章の＜少佐夫人の物語＞も又、その標題には「忘れられていた」物語と記されていた。遠く離れ、一見無関係を装った二つの章は、かくして「忘れられていた」(<sup>82)</sup> vergessen) という形容詞によって結び合わされる。あたかも符牒を介した継承の秘儀のとり結びであるかのように。それはともかく、上に述べた理由からアガーテが要請され、二人の共生によって求められる＜別の状態＞への道程が第二巻の主要なテーマとなっていくとき、＜別の状態＞と＜少佐夫人の物語＞が通底するものであり、後者が＜別の状態＞にとって一種のモデルもしくは原型となっていること、第二巻の起点に＜少佐夫人の物語＞が位置していることがわかるのである。このとき、第一巻と第二巻が、一見しての断層の存在にもかかわらず、＜少佐夫人の物語＞という回路を通して、実は直接に接続されていることも明らかになる。

しかしながら第二巻で、今度はアガーテを相手に＜少佐夫人の物語＞の再現が直線的に求められるのではないことは言うまでもない。前章で述べたように、ムーゼル

が求めるのは過去の乗り越えであり、そのためにこそ＜少佐夫人の物語＞は再び見  
出されねばならなかった。それが見出されたときの状態を、ウルリッヒは「少佐夫  
人の発作」と嘲笑的に呼んでいる。＜少佐夫人の物語＞の理想化を斥けるこのウル  
リッヒの背後には、神秘的体験の内部に隠された論理を抉り出すことによって、自  
らのヴァレリーエ体験を越えようとするムージルの姿が二重写しに透けて見える。  
今、辿り着いた場所から再び歩き始めようとするウルリッヒに託されているのは、  
そのようなムージルの願望なのである。

果して、第二巻で見られるのは、＜別の状態＞というユートピアに通じる道を可  
能な限り厳密に検証するウルリッヒの姿であり、アガーテとの愛の体験は、そのた  
めに限りなく彼方へと引き延ばされていく。このとき我々は、ウルリッヒの検証と  
いう姿勢が第一巻における同時代の非合理主義批判以来、一貫していることにも気  
づく。ただそこにおいては距離を取り、否定の形で行なわれていたのが、第二巻で  
はより真実に近いと思われる領域の内部において為されるにすぎない。例えば神秘  
主義。確かに第二巻は神秘主義的体験の予兆に充ちている。が、実際に体験が為さ  
れるわけではなく、主としてそれについての考察が行なわれるのである。絶筆とさ  
れ、ムージルのこの作品における究極的な到達点と見做されることの多い「ある夏  
の日の息吹き」の章においてすら、よく引用される庭での体験は即座に神秘家の残  
した言葉と比較され、更にはアガーテの反省と、ウルリッヒ / アガーテによる対話形  
式の省察が続くことになる。

あるいは幼児体験。なるほどムージルは後年の日記の中で「子ども部屋のメラン  
コリーにおし包まれたもの思い」であるような幼児期体験を取り上げ、「ここには  
a.Z.(=別の状態)の理論の(…)一つの根がある<sup>83)</sup>」と言っている。それ故にであ  
ろう、幼児体験の重要性を強調する研究者は多い。だがHeydebrandが鋭く指摘し  
たように、それは「一つの根」であって、「神秘的経験それ自体の源泉<sup>84)</sup>」ではない。  
神秘主義にしろ幼児体験にしろ、見落してならないのは、それらが第一巻における  
＜少佐夫人の物語＞への回帰を通して接近可能になったこと、言い換えればあくま  
でも＜少佐夫人の物語＞に類似した体験様式として取り上げられるという点である。  
これら＜少佐夫人の物語＞という核のまわりに集められた様々の体験様式はすべて、  
それ自体が目的ではなく、＜別の状態＞に到るための手がかりとして検証されるのである。<sup>85)</sup>

そのようにして、総じて神秘的体験の現われであると要約しうる領域へ踏  
み込んでいくウルリッヒの姿は、あたかも＜少佐夫人の物語＞を金に変えるための  
賢者の石を探し求める錬金術師のようであるが、その方向は「原初の状態」(874)

へと向けられていく。幼年期は個人史における原初の状態であり、ウルリッヒ／アガーテに与えられた両性具有の意匠、近親姦のモチーフは、人類史における原初の状態たる神話世界への遡行を暗示している。それが作品の中でどのような意味を負わされているのかについて述べることは既に本稿の枠を越えているが、円環を閉じた第一巻に続く第二巻が、＜少佐夫人の物語＞を起点としつつ、言わばその更なる深層に向けての螺旋状の沈下運動を行なうであろうことは予測できるのである。これを Ratio から Mystik への転回と呼ぶことは、もはやできまい。又、Ratio と Mystik の総合を求める行為だと言うことも。ウルリッヒはあくまで理性の持つ厳密さに依拠しつつ、非合理的なものの論理を求めて始原への旅を行なうのである。第一巻はそのための準備的基礎分析の役目を果していると言える。

本稿で使用したムージルのテキストは次の通りである。

Gesammelte Werke, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg 1978:

－Ⅰ: Der Mann ohne Eigenschaften, Roman. ( GWⅠと略記)

－Ⅱ: Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden. ( GWⅡと略記)

Tagebücher, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg, 1976:

－Ⅰ: Tagebücher. ( TgbⅠと略記)

－Ⅱ: Anmerkungen, Anhang, Register. ( TgbⅡと略記)

Briefe 1901–1942, hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg 1981:

－Ⅰ: Briefe. ( BfeⅠと略記)

－Ⅱ: Kommentar und Register.

尚、引用文末尾の数字はすべて GWⅠのページ数である。ただし引用した章を明示した場合、原則としてページ数の表記は省略した。章数は、第二巻と断ったものを除いて第一巻の章を示している。

## 註

- 1) 『特性のない男』第二巻の出版年については、一部に混乱が見られるが、Hedwig Wiczorek-Mair: Musils Roman “Der Mann ohne Eigenschaften” in der zeitgenössischen Kritik. Vergleich der Aufnahme von Band I und Band II. In: Robert Musil. Untersuchungen, Königstein/Ts. 1980, hrsg. von Uwe Baur/ Elisabeth Castex, S. 10 ff. を参照のこと。尚、H. Arntzen も 巻から成る “Musil-Kommentar” において、Bd. 1 では第二巻の出版を 1933 年としているが、Bd. 2 では

- 1932年へと訂正している。Vgl. Helmut Arntzen : Musil-Kommentar zum Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", München 1982, S. 25.
- 2) Elisabeth Albertsen : Ratio und >Mystik< im Werk Robert Musils, München 1968, S. 71.
  - 3) Vgl. Wolfdietrich Rasch : "Der Mann ohne Eigenschaften". Eine Interpretation des Romans. In: Robert Musil, Darmstadt 1982, hrsg. von Renate von Heydebrand, S. 72. 尚, 初出は1967年。
  - 4) Vgl. Dietmar Goltschnigg : Mystische Tradition im Roman Robert Musils, Heidelberg 1974, S. 46f.
  - 5) A. a. O., S. 46.
  - 6) 同様の見解はそれ以前にも見られる。例えば Renate von Heydebrand : Die Reflexion Ulrichs in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", 2. Aufl., Münster 1969, S. 97.
  - 7) Barbara F. Hyams : Was ist "säkularisierte Mystik" bei Musil? In: Robert Musil. Untersuchungen, a.a.O., S. 85.
  - 8) Vgl. Arntzen, a. a. O., S. 76f.
  - 9) Hyams, a. a. O., S. 85.
  - 10) Heydebrand, a. a. O., S. 49.
  - 11) この点について N. Hayasaka は、トリックスターとしてのウルリッヒという視点から言及している。Vgl. Nanao Hayasaka : Ulrich und die Wirklichkeit. Über den ersten Band des Romans "Der Mann ohne Eigenschaften" von Robert Musil. In: Robert Musil und die kulturellen Tendenzen seiner Zeit, München 1983, hrsg. von Josef Strutz, S. 156.
  - 12) 勿論, 例えば情痴殺人犯モースブルッガーの精神を「二千年来の法概念の体系」にあてはめようとする人々の愚かさは、「ペダンティッシュな正確さ」と呼ばれ, 本来あるべき, だがまだ存在せぬ「ファンタスティッシュな正確さ」とは厳然として区別される(第62章)。又, 科学的思考の底に潜む「原悪」に関する考察にあてられた一章もある(第72章)。だがそこに見られるウルリッヒもしくはムージルの態度は, 正面きった攻撃というよりは, イローニッシュな揶揄に近いものであり, これを非合理主義批判と同列に扱うことはできない。よく言われるように, ウルリッヒは合理主義にも非合理主義にも同様に反対するというのとは, 少なくとも第一巻に照らし合わせてみる限り, いささか趣きが違うのである。
  - 13) 上山安敏『神話と科学』岩波書店, 1984年, 39頁。
  - 14) 同上, 41頁。
  - 15) Götz Müller : Ideologiekritik und Metasprache in Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften", München / Salzburg 1972, S. 7ff.

- 16) Peter Dettmering: Die Doppelgänger – Phantasie in Robert Musils “Der Mann ohne Eigenschaften”. In: Literatur und Kritik, Jg. 15 (1980), S. 454.
- 17) 第32章の標題は, “Die vergessene, überaus wichtige Geschichte mit der Gattin eines Majors” となっている。Geschichte mit jm. という形を取るとき, Geschichte は通常, 恋愛事件 (Liebesangelegenheit) の意であり, ここでも「ある少佐夫人との恋愛事件」と読めるが, この章で語られるウルリッヒと少佐夫人との関係は, そのような通常の意味での情事, 恋愛沙汰ではない。少佐夫人体験の核を為すのは, 本文で述べたようにウルリッヒの神秘的体験であり, それは厳密に言えば, D. Kühnも指摘するように少佐夫人「との」(mit) 体験ですらなかった (Dieter Kühn: Analogie und Variation, Bonn 1965, S. 153, Anm. 54. )。通例“Geschichte mit der Frau Major”と記され, 今後作品の中でもそう呼ばれる少佐夫人体験を, 本稿で<少佐夫人の物語>と表記するのも, その際ウルリッヒの体験した神秘の状態を中心に据えて考えているからである。“Geschichte”を「物語」と訳すのは, 本稿I章の末尾で示したように, 少佐夫人体験が一方では語られるという性格を持つためであり — そのときハンス・ゼップは, ウルリッヒがまるで「父ホームーのように物語を語る」と言って非難する (“Schon wieder eine Geschichte! Sie erzählen, scheint es, Geschichten wie der Vater Homer!”) —, U. Eiseleもウルリッヒが作品内で果している「物語を語る」(Geschichten zu erzählen) という役割に着目して, “Geschichte mit der Frau Major”をウルリッヒの語る物語(Erzählungen)の「原型」(Grundmuster)であると見做している (Ulf Eisele: Ulrichs Mutter ist doch ein Tintenfaß. Zur literaturproblematik in Musils “Mann ohne Eigenschaften”. In: Robert Musil, hrsg. von R. v. Heydebrand, a. a. O., S. 181f. )。又, 遺稿部のある箇所では, ウルリッヒは自ら「君は>少佐夫人の物語<を覚えているか」(1274)とアガータに尋ねるが, このとき「>少佐夫人の物語<」は文字通り, “Geschichte der Fr. Mjr.”と記されている。このことから “Geschichte mit der Frau Major”を「少佐夫人の物語」と解釈することが可能であると思われる。
- 18) Albertsen, a. a. O., S. 52f.
- 19) Albertsenも両者の関連を指摘してはいる。しかし少佐夫人体験が「白日の神秘主義」の「先取りであるかのよう (wie) だ」と言うだけで, 前者の作品内における意味関連を問おうとはせず, 却ってこれをエピソード化している (A. a. O., S. 53)。
- 20) Dettmering も又, ウルリッヒの分裂の起原を少佐夫人体験の中に見ている。Vgl. Dettmering, a. a. O., S. 455.
- 21) 第9章の末尾で, ウルリッヒが軍人をやめたのは少尉になったばかりのときであったと言われている。島での体験は, ウルリッヒが少尉のときのものであった。
- 22) 遺稿部のある草稿 (49 “Nachdenken”) では, 少佐夫人体験と「正しい生」(das rechte Leben) とが明確に結びつけられている (1412f. )。

- 23) 上の註 22 で示した草稿では、「正しい生のための準備」(1413)と言われている。
- 24) Heydebrand, a. a. O., S. 97.
- 25) Tgb I, S. 695.
- 26) Ebd.
- 27) Ebd., S. 694.
- 28) Klaus Laermann: *Eigenschaftslosigkeit. Reflexionen zu Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften"*, Stuttgart 1970, S. 131ff. とくに 135f.
- 29) Karl Corino: *Zwischen Mystik und Theaterleidenschaft. Robert Musils Brünner Jahre (1898–1902)*. In: *Robert Musil und die kulturellen Tendenzen seiner Zeit*, a.a.O., S. 11 ff.
- 30) Vgl. Tgb II, S. 12ff. 及び Sibylle Mulot: *Der junge Musil. Seine Beziehung zu Literatur und Kunst der Jahrhundertwende*, Stuttgart 1977, S. 137.
- 31) Vgl. Tgb I, S. 912.
- 32) Bfe I. S. 3.
- 33) Tgb I, S. 12.
- 34) Ebd., S. 17.
- 35) 加藤二郎「R・ムシルの〈ヴァレリー体験〉」『一橋論叢』第79巻(1978), 193-214 頁。
- 36) Eithne Wilkins: *Musil's "Affair of the Major's Wife"*. With an Unpublished Text. In: *The Modern Language Review*, Jg. 63 (1968), S. 87.
- 37) GW I, S. 1636f.
- 38) Corino も同様の見解である。Vgl. Corino, a.a.O., S. 28.
- 39) Tgb I, S. 137.
- 40) Vgl. GW II, S. 954.
- 41) Ebd., S. 136.
- 42) Ebd., S. 137.
- 43) Annie Reniers-Servranckx: *Robert Musil. Konstanz und Entwicklung von Themen, Motiven und Strukturen in den Dichtungen*, Bonn 1972, S. 279, Anm. 69.
- 44) Tgb I, S. 151.
- 45) Ebd., S. 160-167.
- 46) Ebd., S. 153.
- 47) Ebd., S. 38ff. 成立年については Arntzen, a. a. O., S. 15 を参照。
- 48) Tgb I, S. 48.

- 49) Tgb II, S. 918ff. 成立年については S. 918, Anm. b を参照。
- 50) Ebd., S. 919.
- 51) “Grauages nebligster Herbst” には三つの稿があるが、ここで取り上げるのはそのうちの第一稿〔Ⅱ〕(GW II, S. 719 – 729) である。成立年については、P. Henningerの精緻な考証を参照( Peter Henninger : Grauage selbdritt oder: Musilkritik und Psychoanalyse. In: Philologie und Kritik, München / Salzburg 1981, hrsg. von Wolfgang Freese, S. 81ff. )。
- 52) GW II, S. 722.
- 53) 拙論“Über Robert Musils »Vereinigungen«”(京都大学修士論文, 1984年)。
- 54) GW II, S. 193
- 55) Ebd., S. 194.
- 56) スチュアート・ヒューズ, 生松敬三/ 荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房, 1970年, 24頁以降。
- 57) 上山, 前掲書, 10頁。
- 58) GW II, S. 1007
- 59) Ebd., S. 1008.
- 60) Ebd., S. 1007.
- 61) Ebd., S. 1016f.
- 62) Ebd., S. 1017.
- 63) Ebd., S. 1019.
- 64) Ebd., S. 1018f.
- 65) Ebd., S. 1018.
- 66) Ebd., S. 1017.
- 67) Ebd., S. 1058.
- 68) Ebd., S. 1050.
- 69) Tgb I, S. 896.
- 70) GW II, S. 1051.
- 71) Wilfried Berghahn: Robert Musil in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Reinbek bei Hamburg 1963, S. 59.
- 72) GW II, S. 1059.
- 73) Tgb I, S. 643f.
- 74) Ebd., S. 645.
- 75) Ebd., S. 650.
- 76) Vgl. Eberhard Hilscher: Robert Musils Suche nach dem “anderen Menschen” In: Literatur und Kritik, Jg. 7 (1972), S. 343.
- 77) Vgl. Tgb II, S. 96ff.



- 78) GW I, S. 384f. Vgl. GW II, S. 195.
- 79) ルネ・ジラール, 織田年和訳『地下室の批評家』白水社, 1984年, 7 - 8頁。
- 80) Hayasaka, a. a. O., S. 159.
- 81) GW I, S. 772.
- 82) Vgl. Laermann, a. a. O., S. 140.
- 83) Tgb I, S. 943.
- 84) Heydebrand, a. a. O., S. 95.
- 85) Vgl. a. a. O., S. 96.